

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

People who endure : Hisaye Yamamoto and Nikkei experiences

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/570

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



忍ぶ人々——Hisaye Yamamoto と日系体験

篠田実紀

太平洋戦争後、歴史から忘れ去られようとしていた日系アメリカ人の苦闘を短編小説の中に再現し、多くの日系人に希望の光を与えた2世作家 Hisaye Yamamoto が、2011年1月30日、Los Angeles で89歳の生涯を閉じた。100年以上に渡って Los Angeles の Little Tokyo を中心とする日系人社会で刊行されてきた新聞 *The Rafu Shimpo* (羅府新報) は、Yamamoto を追悼する様々な分野の人々のコメントを集めた記事を掲載した。その記事のタイトル “Humble Giant of American Literature” が示すとおり、コメントを述べた人々の多くが、彼女がその作風と同様に非常に謙虚な人物であったことを認める一方で、彼女の作品に充満する力が日系人を激励し、勇気づけるという偉業を成し遂げたと評価している。そのうちの一人、Japanese American National Museum の学芸員 Patricia Wakida は、“Hisaye’s prophetic voice, tempered by a tremendous wit and intelligence, spoke so much of the unspoken in the Japanese American experience, both pre-war and during the WWII incarceration.” と Yamamoto の作品を絶賛する。Yamamoto の作品に早くから注目してきたアジア系アメリカ文学研究者 Elaine Kim も同様に、“She was so-so JA [*i.e.* Japanese American] ! By that I mean she had that very tranquil-seeming surface and she didn’t say much, but her writing revealed the spunky, quirky, keenly observant, spicy spirit that was burning beneath.” と、静かな語り口の深層に複雑な精神を潜ませた Yamamoto の才能を評価する (“Hisaye Yamamoto: ‘Humble Giant of American Literature’”)。多くの日系1世や

2世が語ることができずに沈黙の中に埋没させがちな日系社会の姿を、誇張することなく淡々と語りながら、日系人社会が内面に抱え込んできた苦悩をひっそりと描き出していくところに、Yamamoto の文学の最大の魅力がある。

渡米以降、特に西海岸に居住した日系人は、外国人土地法（Alien Land Law）による土地所有制限や太平洋戦争中のキャンプ収容という負の歴史の重荷を背負ってきたが、彼らは、これらの差別的待遇による苦難に対して、抵抗ではなく忍耐（我慢）を選んだ。日系3世のジャーナリスト Gil Asakawa は、国家による収容を不当と感じる者がいても、抗議の声をあげたり抵抗運動が起こったりしなかったのは、日系社会で重んじられる“*gaman*”と“*shikataganai*”という価値観によると指摘する。

The main values that have held Japanese American communities in check (and in the process made them practically invisible to the American mainstream) can be encapsulated with two phrases: *gaman* and *shikataganai*. Both helped people of Japanese descent through the injustice of the forced evacuation and internment during World War II. And both still have a powerful hold over many of us. (Asakawa, 42)

キャンプに収容された11万人の日系人のうち3分の2はアメリカ国籍を持ち、国民のうちの特定の人種を転住させることは憲法上問題があるにもかかわらず、ほとんどの日系人は抵抗せず、「しかたがない」と諦め、従ったのである。Harry Kitano は、キャンプ収容を“domestic colonialism”と呼び、南アフリカのアパルトヘイトに近い現象だと指摘する。戦前の法律による差別が常態化することで、日系人自身が徐々に“less than equal”を当然の現実として認識するようになっており、戦時中“evacuation”という名の下に日系人収容が比較的スムーズに進んだ理由のひとつがその心理にあると Kitano は分析する (Kitano, 154)。日系人自身が、差別を受けるのは自

分たちが劣等な二級市民であるから「しかたがない」と思い込み、ひたすら「我慢」する道を選んだのである。そのような意識から、日系人は、民族としての自信や誇りを失い、特に Hisaye Yamamoto と同年代の20代前半で収容を体験した2世の多くが、“Japanese”としての自らを語ることをタブー視するようになる。Yamamoto 自身の弟 Johnny を含め、2世の若い男性の中には、あえてアメリカ軍として戦地に赴くことで愛国心を示してアメリカ社会に受け入れられようとする者もいた。

多くの日系人は、戦後も心の重荷を下ろすことができず、渡米以来の辛い経験を言葉にすることなくどこまでも「我慢」することによってアメリカ社会に同化しようとした。「我慢」「しかたがない」は、人種差別に真っ向から立ち向かったアフリカ系の人々と比べると狭く軟弱な態度と感じられることも多いが、自らを主張せずひたすら忍ぶことが、日系人が戦中戦後を生き抜くための唯一の技であった。Hisaye Yamamoto の文学は、日系社会を語ることを恥じる人々に対して、日系人が自らを語ることの意義を伝えた。Yamamoto は戦前から新聞のコラムを書いていたが、*Kashu Mainichi* に連載されたコラムを読んだ同世代の Wakako Yamauchi は、“This is wonderful! You can be honest.”と感じたと語る (Cheung, “Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi,” *Words Matter*, 以下 *Words Matter*, 344)。戦時中、Yamamoto と同じ Poston のキャンプに収容された Yamauchi は、そこで Yamamoto と交流しながら文筆活動を始めることになる。Yamamoto の作品は、更に世代や分野を越えた日系人に活力を与え、アメリカ全土で活躍する日系人を生み出す原点ともなった。彼女の文学は、苦悩を黙って耐え忍ぶ人々の姿を淡々とした筆致で語る。本論文では、彼女の代表作 “Seventeen Syllables” (1949), “The Legend of Miss Sasagawara” (1950, 以下 “Legend”), “Yoneko’s Earthquake” (1951, 以下 “Yoneko”) を取り上げ、そこに展開される声なき人々の声に耳を傾けたい。

1) Hisaye Yamamoto の俳句的作風と日系体験

Hisaye Yamamoto は自らを “humorist manqué” と評する (Cheung, *Words Matter*, 347)。彼女の作品は、funny な書き方をしながら tragic な結末に終わることが多い。このような彼女の作風は「顔で笑って心で泣く」という日本語の表現で形容できる。それは、苦境を「我慢」で乗り切り、「しかたがない」と笑ってかわしてきた日系人の態度とも重なる精神性である。本論文でとりあげる3作品は、「顔で笑って心で泣く」典型といえよう。その最大の理由は、表面上の主人公や語り手の知らないところに別の悲劇的な物語が存在することである。King-Kok Cheung は、このような語りの手法を “double telling” と呼び、感情を言葉で表現せず黙する1世の両親の “pregnant silence” の意味を正確に理解できないナイーヴな2世の視点で語ることによって、“hidden plots” を組み立てて行くと論じる (Cheung, *Articulate Silences*, 29)。Stan Yogi は、Cheung の言う “hidden plots” 即ち表面上の語りの背後で展開する第二の物語を “buried plots” と呼び、“Seventeen Syllables” と “Yoneko” では、1世女性の辛い体験と娘に伝えるべき “troubling legacies” が “buried plots” として開示されると述べる (Yogi, 157)。

“Seventeen Syllables” では、移民1世と2世の俳句をめぐる意思のすれ違いや思春期の Rosie の淡い恋愛体験がコミカルに語られながら、最後に Rosie の母の過去の悲劇的な恋愛体験が母の口から告白される。“Yoneko” では、10歳の少女 Yoneko の視点で大地震とそれに伴う日系人の家庭環境の変化が、フィリピン人使用人 Marpo や弟との楽しいエピソードを交えて軽快に語られる背後で、彼女の母と Marpo との不倫とその結末が大人の読者にしか分からない形で示唆される。これら2話はともに、不安定な子供の視点からの語りであるために、彼女達の認識の外にあることは一切語られない。そのため、物語の背後に隠されている不穏な “buried plot” に気づくのが、

主人公ではなく読者であるように仕組まれている。自分を中心とした世界しか語らない Rosie や Yoneko の視点を追いながらも、彼女達以外の登場人物の所作に目を配る大人の読者は、物語の中に内包される、Rosie の両親の不和と母の暗い過去、Yoneko の父の性的不能および母と Marpo の不倫、母の妊娠・中絶という、ゆゆしき悲劇の種を察知する。

“Legend” は、他の2作品より年長の20歳の女性の1人称語りの形式をとるが、この作品の語りの視点も同様に、限定的であるといえる。娘の視点で彼女の家族のことを語る他の2作品とは異なり、“Legend” の中心人物 Miss Sasagawara は語り手 Kiku の親族ではなく、たまたま同じキャンプに居合わせた女性であり、語り手との距離が遠い (Cheung, *Articulate Silences*, 54-55)。更にタイトルの “legend” という語が示すように、他の2作品のような語り手の直接体験は少なく、他者の話の又聞きがほとんどであることも、この作品の語りを限定的とする要因である。“Legend” は、一見キャンプの日常生活全般を描いているように見せかけながら、語りは徐々にキャンプの住人でバレリーナの Miss Sasagawara という特定の人物にスポットライトを当て、焦点を絞っていく。そして、収容生活を何とか生き延びる Kiku 達一般人の描写とは別次元で、バレリーナとしての才能を持ちながら周囲に狂人扱いされた彼女が最終的には精神に破綻をきたして施設に送られるという、悲劇的な結末へと読者を導く。

Yamamoto の作品は、このように、“buried plots” を含蓄しながら語り、客観に徹した簡潔な表現の中に重層的な意味合いを凝縮しているという特色から、俳句との類似点を指摘される。たとえば、King-Kok Cheung は、“Yamamoto’s style matches the verbal economy of haiku, in which the poet ‘must pack all her meaning into seventeen syllables only.’” と指摘する (Cheung, “Introduction,” 10)。俳句の最大の特徴 “verbal economy” は、徹底した感情の抑制によってのみ可能であり、17音節という短い客観表現の中にかに主観を充填するかが、すぐれた俳句を詠む決め手となる。俳

人の高浜虚子は、俳句の熟練段階について、「俳句は客観写生に始まり、中頃は主観との交錯が色々あって、それからまた終いには客観描写に戻るという順序を履む」と説く。詠み人の心とあまり関係がない花や鳥を客観的に描くことを繰り返すうちに、それらの対象と心が近くなり、ついには詠まれた対象が「作者の心持を写す」ことになり、最終的には「花や鳥を描くのではなく作者自身を描くのである」（高浜虚子、35）。身の周りの事象をスケッチしただけのように単純な語りの中に、日系人としての自らの思いを込めた Yamamoto の作品は「客観描写」の域に到達しているといえよう。

しかし、主張の少ないその作風と同様、エッセイやインタビューでも感情に流されることなく控えめな応答をする Yamamoto は、自らを職業作家と公に認めたことすらなく、自分の職業は全ての“honesty list”において“housewife”であり（Hisaye Yamamoto, 以下 Yamamoto, “Writing,” 59）、自分の周辺の出来事や人から聞いた話を潤色して書いた（“embroidered”）だけだと謙遜する（Crow, “A MELUS Interview,” 以下 MELUS, 74）。更に、特定の“audience”を想定して書いているかという質問に対しては“I don’t think a writer aims at any audience.”（Cheung, *Words Matter*, 352）, “Asian American writer”というレッテルについては“Whatever I’m called is not going to affect what I do”（Cheung, *Words Matter*, 351）, “Any label is okay, or no label.”（Cheung, “Interview with Hisaye Yamamoto,” 以下 “Interview,” 84）と、作家としての評価や自分の作品に対する反響には無関心であるかのような答え方をする。それでも、彼女の作品は単なる文学少女の道楽にはとどまらない。彼女自身も認めるとおり、1955年の結婚を機に物書きを中断して主婦業に専念していると精神的に不安定となり、60年頃から“therapy”のために再び筆をとった（Yamamoto, “Writing,” 67）。本人のプロ意識の有無にかかわらず、書くことが彼女の天職であったことは間違いのない。彼女のエッセイやインタビューの所々から、彼女が日系2世としての特別な使命感を持って言葉を編んできたということが伝

わって来る。

穏やかな物腰を保ちながらも、Yamamoto は、特に戦時中の体験に話が及ぶと語調を強めるという。彼女とインタビューをした Charles Crow は、会談中の彼女の印象について、“Her voice was soft and carefully modulated, easily spilling into self-deprecation laughter: it took on a certain edge only when speaking of her incarceration in the Poston relocation center during World War II” (Crow, “MELUS,” 73) と述べている。Yamamoto が Arizona 州 Poston のキャンプに収容されたのは20歳の時で、そこで3年間を過ごした。彼女は収容には反対で、JACL (Japanese American Citizen’s League) に所属する近所の女性が、アメリカへの愛国心を示すために進んでキャンプに入るという嘆願書へのサインを求めた時にも断ったと言う (Cheung, *Words Matter*, 353)。最終的には収容されることに同意するが、収容中も新聞 *Poston Chronicle* に寄稿したり記者として取材するなど、自分も含めて被収容者の声を記録することを忘れなかった。弟の Johnny が日系人のみで編成された442部隊に入隊してイタリア戦線で戦うと知った時のことを、“Antiwar as I was or am, I didn’t think he’d done a good thing.” と振り返り、彼の戦死については、“I don’t know if that would have happened if we weren’t in camp.” と、収容への批判のニュアンスを込めて語る (Cheung, *Words Matter* 358)。

アメリカが建国200周年を祝った1976年、時の大統領 Gerard Ford は Proclamation 4417, “An American Promise” の中で、1942年に Franklin Roosevelt 大統領が発し、日系人収容を引き起こした Executive Order 9066 を撤回した。この年に発表した “… I Still Carry It Around” というエッセイの中で、Yamamoto は、ナチスドイツによるユダヤ人強制収容に比べたら日系人収容は “benevolent” ではあったが、だからといって正しいことであつたわけではない (“we also know that it, too, should never have happened.”) と語る。収容という事実そのものもさることながら、収容経験が

その後の日系人に与えたインパクトはそれ以上に強く、多くの日系2世が自らの体験について口を閉ざした結果、2世のアイデンティティがぼやけてしまう結果になったと説明する（Yamamoto, “. . . I Still Carry It Around,” 11-12）。

Yamamoto は自らを “Christian anarchist” と称し, “I agree that ‘the government is best which governs least,’ the government by mutual consent in small groups—communities—is the ideal form of democracy.” と語る（Cheung, “Interview,” 85）。彼女は投票もしないということだが（Cheung, *Words Matter*, 352），ここまで政府に対して懐疑的であるのも、上のような日系体験に端を発しているのであろう。

Yamamoto の主要作品の中で直接的にキャンプが舞台になっているのは “Legend” だけで、それ以外の作品は日系人収容とは無関係の様相を呈する。時代が戦前の30年代に設定されている “Seventeen Syllables” と “Yoneko” も、単純に1世の夫婦間断絶と1世と2世の世代間断絶を描いているように感じられる。しかし、日系人の渡米以来の歴史という長期的視野に立つと、Yamamoto も認めるとおり、これらの物語の背後には Asian Land Law という差別的な法律があり（Cheung, “Interview,” 77），そこから家族の悲劇が生じ、しかもその悲劇が表面化せずに深層に沈潜していく様が見えてくる。これら3作品は、日系人の渡米以来2世代間を貫く幾多の苦悩の歴史のアレゴリーであるとともに、アメリカ合衆国の人種政策への鋭い批判の眼差しをも秘めている。

2) 権威を失う侍たち

Yamamoto の作品は、女性の登場人物に注目して読まれることが多い。“Seventeen Syllables” と “Yoneko” も、暴力的な夫により自由を奪われる1世女性の悲劇として論じられる傾向にある（Stan Yogi, Sau-Ling Wong,

Traise Yamamoto など)。Yamamoto の作品が最初に本としてまとめて出版されたのは、1985年であり、文学批評で取り上げられるのもそれ以降である。70年代から80年代にかけて、Toni Morrison や Alice Walker などのアフリカ系アメリカ人女性作家の作品が高く評価され、同じマイノリティ文学の範疇に属する日系人女性作家の作品も同系列的にフェミニズム的解釈を施されたのは時代の流れであったといえよう。しかし、Yamamoto の作品が最初に雑誌に掲載されたのは、60年代中盤の女性解放運動以前の1950年前後から60年代初頭であり、1世女性の悲劇を描きながらも、女性差別のみを強く意識して書かれたものではない。

Yamamoto の文学がアフリカ系アメリカ文学のフェミニズムとは異質であるということは、「被害者」の女性ではなく「加害者」の男性に注目するとわかる。“Seventeen Syllables” と “Yoneko” の父／夫は、ともに、アフリカ系アメリカ文学にしばしば登場する父／夫と同様、暴力的な破壊者として登場する。“Yoneko” の Mr. Hosoume は、子供の面前で妻に手をあげ、Mr. Hayashi は、妻の俳句の賞品である広重の額を破壊し、火にくべる。また、故意ではないにしても、Mr. Hosoume は妻の不倫の子供を墮胎するために病院に向かう途中で自動車で犬をはね (Yamamoto, *Seventeen Syllables and Other Stories*, 以下 SS, 54)，“Seventeen Syllables”にもこれと似た自動車事故の描写が、俳句に没頭する妻に不機嫌になった父に Hayano 家から帰宅させられる Rosie の想像の中で出てくる (SS, 12)。妻子の意思を無視した家父長的な男性のイメージは、実際の肉体的暴力描写に限られない。Mr. Hayashi は妻の俳句という趣味に一切の価値を認めようとせず、Mr. Hosoume は妻の意見も “*nama-iki*” と聞き入れず、Marpo を一方的に追放し、おそらくは独断で、墮胎という残酷な選択肢を妻に強いる。これらの点にのみ注目すると、Mr. Hayashi も Mr. Hosoume も暴力的で専横的といえる。しかし、物語全体を通して見ると、彼らは決して日常的に乱暴なのではなく、短絡的に感情を暴発させているのでもない。彼らは、たとえば *The*

Bluest Eye の Cholly Breedlove や *The Color Purple* の Mr. __ など、アフリカ系アメリカ文学にしばしば登場する夫のように、仕事もせず酒の勢いで不満のはけ口として恒常的に弱者の妻を殴ったり娘をレイプしたりという「悪者」ではない。Cheung が指摘する通り、Yamamoto の作品は “male villains and female victims” という紋切り型ではない (Cheung, *Articulate Silences*, 52)。“Seventeen Syllables” と “Yoneko” の 1 世男性達は、孤独や嫉妬などの感情を抑え、我慢に我慢を重ねた末、しかたなく苦渋の選択をするのである。

Charles L. Crow とのインタビューにおいて、Crow が、自分の学生たちは、Mr. Hayashi がしていることは “murdering of the mother’s voice” であり、“great crime” だとみなしていると指摘すると Yamamoto は、“I didn’t think I was being vicious toward the husband, because he was only acting the way he’d been brought up to act, the way men were supposed to be.” と答える (Crow, “MELUS,” 80)。Yamamoto は Mr. Hayashi や Mr. Hosoume を悪者として描いていない。Mr. Hayashi も Mr. Hosoume も、共にまじめで勤勉で努力家の農夫であるが、自己の感情を表現せずに耐え忍んだ挙げ句、追いつめられて破壊や暴力に訴えている。

King-Kok Cheung は、1 世男性の Mr. Hayashi や Mr. Hosoume もまた “victim” であると解釈する (Cheung, *Articulate Silences*, 47)。彼らは、男は黙って耐えなければならない、感情を表明してはいけない、という日本人の “cultural rules” と、アメリカ社会の人種差別 (“politics of race”) の板挟みとなり、その結果暴力に訴えざるを得なくなったと Cheung は述べる (Cheung, *Articulate Silences*, 49)。欧米人向けに英文で *Bushido* (『武士道』) を著した Inazo Nitobé (新渡戸稲造) が、“Self-Control” の章で説くように、侍精神を重んずる明治生まれの日本男児にとって、“It was considered unmanly for a samurai to betray his emotions on his face.” であり、心身の痛みや愛情を表現する自由は家長たる男性に許された行為ではない

(Nitobé, 52)。一家の主には、妻子を支える経済力や生活能力だけでなく、何事にも動じない自己抑制が要求されたのである。

Mr. Hayashi は、俳句に打ち込む妻に不満を抱きながらも、娘の力を借りながら黙々と農作業に励む。自分の土地も持たず、経済的に余裕のない日系農民が俳句に打ち込むことなど贅沢だと内心思っているはずの Mr. Hayashi であるが、妻が俳句を作ったり俳句好きの人々と話したりする自由は、比較的認めている。妻に対する彼の寛大さが証明されるのは、家族を連れて Hayano 家に行く場面であろう。Hayano 家訪問は、Mr. Hayashi にとって何のメリットもなく、彼は妻と娘を自動車で運ぶ運転手の役割しか担っていない。Mrs. Hayashi は Mr. Hayano と俳句の話に熱中し、娘の Rosie は Hayano 家の娘たちと遊んで楽しんでいるが、Mr. Hayashi は妻たちの会話にも入れず、精神的に病んでいて無反応の Mrs. Hayano に話しかけても応じてもらえず、翌朝早くからの農作業を気にかけてながら手持ち無沙汰の時間を過ごす。広重の額を携えて Mr. Kuroda が訪れた時も、Mr. Hayashi は即座に彼を追い出さず、しばらくは妻と話をする猶予を持たせている。妻が家族の生きる糧であるトマトの収穫に俳句を優先したと実感した時、業を煮やした彼が行き着いたところが破壊行為であった。

Mr. Hosoume の場合は、地震で身体不自由にならなければ、働き者の妻と Marpo と共に農業に従事しながら、平穏な日々を過ごしていたであろう。地震前の彼は妻と Marpo と共に畑で汗を流し、フィリピン人の Marpo に対しても、差別することはなく、“the best hired man he had ever had” と高く評価する (SS, 47)。しかし、地震の時の怪我の後遺症で在宅療養を余儀なくされる。家長としての権威は、健康な体で家の外で働き、その収穫を家の中に持ち帰ることを前提に確保される。帰宅すると家長は、感情を表面化してはいけないという武士道精神により、妻子に愛情を示すこともなく、家事を手伝うこともなく、何もせずに押し黙っていることが多い。しばしば家族はその威圧感を不快に感じるが、保護者として家長を尊敬することを要求

されるので、不満を示すことはない。Mr. Hosoume は、地震のために、家長に要求される経済力と生活能力を喪失し、実質上家長でなくなってしまうが、在宅を強いられてもなお家長であった時の態度を保持する。家族を支える能力もないのに家にいて何もしない彼は、次第に居場所を失い、娘の Yoneko の友達が来ても歓迎することもなく、菓子作りに興じる娘が砂糖を無駄遣いしたと指摘して疎ましがられるようになる。

“Yoneko” では、Yoneko の指のマニキュアの件を発端に Hosoume 夫妻が口論となり、Mr. Hosoume が妻に手をあげるまで、物語の中で Mr. Hosoume 自身の感情が表現されることはない。しかし、物語の全体的展開と、Mrs. Hosoume が密かに娘に渡す指輪が、読者に、Mrs. Hosoume と Marpo との間に何かがあると感じさせ、Mr. Hosoume も当然二人の間に疑惑を抱いていると推測させる。指輪を受け取る時に母から “If your father asks where you got it, say you found it on the street.” と言われた Yoneko は、母と秘密を共有することによってうっとうしい父に “revenge” してやろうと考えるが、Mr. Hosoume は指輪のことを尋ねない。この場面の語りは、“Mr. Hosoume never asked about the ring; in fact, he never noticed she was wearing one.” とあるが、これはあくまでも Yoneko の認識であって、それに続く部分 (“Yoneko thought he was about to, once, but he only reproved her for the flamingo nail polish she was wearing”) から、爪のマニキュアに気づいた父が、同じ指にはめている指輪に気づかないはずはないという矛盾が生じることがわかる (SS, 52)。つまり、父は実際は指輪に気づいており、それを Marpo が妻に贈ったのではないかという疑惑も持っていたが、気づかないふりをしていたのではないかという可能性が浮上する。父の仕事を手伝う “Seventeen Syllables” の Rosie は、母を愛してはいるが、俳句の世界に入って行けないという点では、父と同じ世界に属していた。Mr. Hayashi は妻よりも娘と会話することが多く、娘はしばしば父から母への伝言役となり、父は “Ha, your mother’s crazy!” とつい不満を娘に漏らすこ

とさえある (SS, 17)。それに対して Yoneko には、父との接点がほとんどない。Yoneko は幼い頃から美しい母に憧れてまわりつき (SS, 53)、指輪の件で母と秘密を共有できることを喜んでいる。加えて Yoneko は、母と同様、家長である父よりも逞しい万能の使用人 Marpo に愛着を覚えている。娘の共感を得られない Mr. Hosoume は、完全孤立状態である。Yoneko の指輪には気づかぬふりをしていた Mr. Hosoume も、彼女が爪を染めた時、自らの家長としての権威の完全崩壊の危機を確信する。指輪は母から譲り受けたものであり、Yoneko の意思で身につけたものではないが、マニキュアは、Yoneko の意思で施したものである。娘が家長の道徳観を受け入れず、男を惹き付ける性的魅力を持つ Mrs. Hosoume の領域へと遠ざかって行ったと感じた時、精神的に追いつめられた Mr. Hosoume の苛立ちが頂点に達する。娘の行為に非難の意味を込めた “You look like a Filipino” という言葉は、使用人の分際で妻を寝取ったフィリピン人 Marpo に対する糾弾の意味を込めている (SS, 52)。

“Seventeen Syllables” と “Yoneko” には破壊と喪失のモチーフがよく見受けられる。前者では、Mr. Hayashi による広重の額の破壊と焼却、Mrs. Hayashi の過去の死産があり、後者では、Mrs. Hosoume の不倫の子供の墮胎、その伏線となる Mr. Hosoume の乱暴運転による犬の死、Marpo の実質的追放、そして Yoneko の弟 Seigo の突然の死がある。破壊の主体は多くの場合、1世の父親である。しかし、上で述べたとおり、破壊者として描かれる彼らは、生来破壊的な性格の持ち主ではなく、我慢を重ねて最終的に破壊という形で感情が噴出することになる。“Yoneko” の場合、表面上の破壊者は Mr. Hosoume だが、真の破壊者は “earthquake” であり、彼もまた地震という大きな力によって心身の健康を破壊された犠牲者である。“Seventeen Syllables” でも、Mr. Hayashi の破壊の背後には、土地所有制限による貧困など、様々な社会的要因が存在する。

二つの物語に示される破壊は、何を象徴するのだろうか。King-Kok

Cheung が行った Hisaye Yamamoto と Wakako Yamauchi の合同インタビューの中で、二人の作家は戦時中のキャンプ収容に関して、この時に伝統的な日系人の家族関係が崩壊したと振り返る。家族形態の変化について、Yamamoto は、共同の食堂で被収容者全員が食べることになって、若い世代は家族ではなく友達と食べるようになったことを挙げ、Yamauchi は、17歳以上の被収容者に課されたアメリカへの忠誠心を問うアンケートを挙げる (Cheung, *Words Matter*, 357)。更に Yamamoto は、弟の Johnny が442部隊に入隊したときも、父は彼を止めなかった言い、“when young people want to go out, they go out.” と述懐する (Cheung, *Words Matter*, 358)。収容生活を通して、家長である父親を柱とした父系社会が崩壊し、子供達は権威を失った父に相談することなく自らの将来を決定するようになる。Pearl Harbor 奇襲による日米開戦と日系人収容は、日系社会に強いられた致命的打撃であった。Yamamoto の父も含め、戦前1世がこつこつと努力して蓄えた財のすべてが、収容によって水の泡と消え、アメリカか日本かという二者択一を迫られた日系人は、日本を捨てることを余儀なくされ、世代を越えて譲渡すべき価値観まで喪失してしまう。“Seventeen Syllables”でも“Yoneko”でも、命を落とす子供は男児である。特に“Yoneko”では Mr. Hosoume は地震が原因で性的不能になったという含蓄があるので、今後彼が子宝を授かる可能性はなく、一人息子 Seigo の死は、Hosoume 家の断絶を意味する。Marpo と彼との間に授かった命を失ったのみならず、最愛の息子の命まで奪われ悲嘆に暮れる Mrs. Hosoume の姿に寄り添うように、妻に対して“very gentle”となった Mr. Hosoume が、“we must make your mother laugh and forget about Seigo”と強がる姿が配される (SS, 56)。父系社会の後継者となるべきだった Seigo を最も忘れることができないのは、実は、悲しみの情を表現することを許されぬ彼自身なのである。

3) 踊らないバレリーナ

戦時中の日系人収容キャンプを舞台とする“Legend”の語り手 Kiku の年齢は、収容された時の Yamamoto と同じ20歳に設定されている。Rosie や Yoneko とは異なり、自立した大人ではないものの、自我がある程度確立した年代である。しかし、この物語の中心人物は、同じキャンプの住人 Miss Sasagawara というバレリーナであり、語り手自身やその家族ではない。この物語で特徴的なのは、語り手の直接体験は少なく、大半が、語り手の友人 Elsie ら他者の話の又聞きで構成されているということである。僧侶の父 Rev. Sasagawara と共にキャンプに来た時から、プライバシーに立ち入られることを嫌う Miss Sasagawara は、他のキャンプの住人から“crazy”と思われ避けられる (SS, 23)。語り手が、“if Miss Sasagawara was not one to speak to, she was certainly one to speak of, and she came up quite often as topic for the endless conversations which helped along the monotonous days.”と認めるように、Miss Sasagawara は人々と接触しないことから、しばしば収容生活に退屈した人々の噂の種となる (SS, 22)。

King-Kok Cheung は、Miss Sasagawara の狂気に疑問を投げかけ、この物語の中で真に狂っているのはだれか (“Who then is mad?”) と問い直す (Cheung, *Articulate Silences*, 56)。周囲から狂っているとされる Miss Sasagawara であるが、キャンプの“total lack of privacy”という異常な環境にあって、一人で食事をしたりシャワーを浴びたりしたいという彼女はむしろ正常であり、それよりも、異常な環境の中で“felt free the first time”と感じる Rev. Sasagawara や、キャンプ生活を後から“good old days”と懐かしもうとする Kiku や Elsie の方が異常なのではないかと Cheung は指摘する (Cheung, *Articulate Silences*, 64-65)。更に Cheung は、Rev. Sasagawara は娘以上に他人との接触を避けて自室に引きこもっているにもかかわらず、だれも彼を“crazy”とは評価せず、むしろ“lofty and reli-

gious” とみなす点に注目し, “His attitude is respected, hers suspected” と表現する (Cheung, *Articulate Silences*, 57)。

Miss Sasagawara が “crazy” だという噂を最初に広めたのは同じバラックに住む Sasaki 夫妻である。バラック全体をきれいにしようという厚意から, Miss Sasagawara の居住場所にもホースで水をかけようとした Mr. Sasaki を, 彼女がスパイ呼ばわりしたことが発端となった。しかし, Kiku の直接体験を通した Miss Sasagawara は, 人間嫌いとはほど遠く, きわめて正常な人間であり, 友好的ですらある。物語の最初の方で Elsie の “Hello, there!” という呼びかけに対して Miss Sasagawara が “hopeful” な調子で “Do I know you?” と応じ, 会話を続ける意思を示す場面がある (SS, 22)。この場面で Kiku と Miss Sasagawara の間にそれ以上の交流が進まないのは, Miss Sasagawara ではなく Kiku の側に原因がある。“Do I know you?” という Miss Sasagawara に会話を望む雰囲気を感じていながら, Kiku は, 聞こえないふりをしてこれ以上関わらないでおこうとする Elsie に同調する。Elsie は他人の話を鵜呑みにして Miss Sasagawara は頭がおかしいという先入観を抱いているので, 自分から声をかけておきながらそれ以上の関わりを避ける。会話をすれば Miss Sasagawara の狂気は根も葉もない “legend” にすぎないことがわかるかもしれないが, Kiku は Elsie にそう指摘することもなく, “and that was that.” と片付ける (SS, 22)。療養所からキャンプに戻って来た Miss Sasagawara からは狂人の要素は更に薄れ, 進んであいさつをする “friendly being” に変貌している。Kiku がシャワー室で出会った時, Miss Sasagawara は, Kiku がヴァイオリンを弾くことを知っており, 自分のギターと合奏しようと楽しそうに笑いながら申し出る (SS, 28)。Miss Sasagawara が実際は狂人でないということは, 最初は彼女を怖がっていた Kiku の妹の Michi が, 彼女のダンス教室に入ると彼女のことが大好きになるという事実からも, 証明される。

Miss Sasagawara が “crazy” とされるのは, 彼女の真実の個性からでは

なく、39歳で独身、バレリーナとしてアメリカ全土を回って来たという、他の人間とは異なる特殊な属性に由来するところが大きい。彼女は Mari というシンプルな first name を持つにもかかわらず、Miss Sasagawara と呼ばれる (SS, 22)。彼女はバレリーナとしてアメリカ社会で活躍できるほどであるから、2世である可能性が高いが、Kiku たち若い2世のように first name で呼ばれることはない。日系人社会だけでなく、1940年代のアメリカ全体の標準から言っても、39歳の女性であれば、Mrs. であるというのが社会常識である。作品中の Mrs. Sasaki も、“young” という形容詞が付されるので2世だと思われ、しかも Miss Sasagawara よりも若い30代前半と推測されるが、既婚女性であるため姓で呼ばれている。当時の日系人社会では、30代の女性は「女」としてではなく「妻／母」として評価を受ける。従って、その年齢になっても Miss である女性はそれだけで社会的規範を逸脱した変わり者とみなされる。Miss Sasagawara が2世の若者たちが大声でふざけ合うのを指をくわえて眺めている姿を発見した Mrs. Sasaki が発する言葉 “You’re old enough to be their mother!” が、彼らの内部にある常識を端的に示す (SS, 31)。39歳になっても「妻／母」ではなく「女」であり続ける Miss Sasagawara は、完全な他者として、社会から排除されていく。

しかしながら、Miss Sasagawara を非難する Mrs. Sasaki 自身、「妻」ではあっても「母」ではない。Kiku の語りは、この女性を “that plump and giggling young woman who always felt called upon to explain that she was childless by choice” と描写する (SS, 32)。彼女はおそらく Miss Sasagawara より若いですが、既に肉体的魅力は失われており、加えて子供がいないということに何らかの劣等感を抱いていると考えられる。結婚はしているが、容色は衰え、子供もなく、Miss Sasagawara のような職業能力もない彼女が、自分より年上のこの美しいバレリーナに嫉妬の念を抱いていることは想像に難くない。Mrs. Sasaki だけではなく、若い Kiku や Elsie もまた、“Elsie and I . . . talked awhile jealously of the scintillating life of Miss Sa-

sagawara had led until now” と、Miss Sasagawara に嫉妬している。その一方で彼女たちは、キャンプを出たら、まず大学を出て、仕事を見つけて、“two nice, clean young men, preferably handsome, preferably rich, who would cherish us forever and a day” を見つけなければいけないという結論に落ち着く。彼女達は、「楽しむことができたから結婚したことがないことを残念に思わない。」（“she wasn’t sorry she never got married, because she’s had her fun”）と断言できる Miss Sasagawara に憧れ、彼女のような “scintillating life” を送りたいが、それを諦め、夢を持たずに安全な軌道に乗った人生で妥協しようとする（SS, 21）。

収容前は一人の個性を持ったバレリーナとして白人社会に歓迎されてきた Miss Sasagawara の充実した生き方が、彼女と同じ民族で構成されたキャンプという環境では拒絶されたというのは、皮肉な現実である。それに対して彼女の父 Rev. Sasagawara の評価は、娘のそれとは正反対と言える。キャンプという閉ざされた特殊環境においてのみ、しかも 1 世のみから、彼は reverend として尊敬され歓迎される彼であるが、日系社会の一步外に出たら不気味な他者として拒絶されると想像できる。キャンプ内でも、他者との接触を避ける彼は、2 世の Kiku の目には単なる “slight and fragile-looking old man” であり、“always seems to be wandering lostly” という彼の姿は、Miss Sasagawara 以上に不可解な存在である（SS, 21-22）。

ここで注目したいのは、同じ 1 世の父を描いても、作者が、Rev. Sasagawara という登場人物を、“Seventeen Syllables” や “Yoneko” の父親と同じように描いていないという点である。Rev. Sasagawara の沈黙は、Mr. Hayashi や Mr. Hosoume の沈黙とは性質を異にする。彼の沈黙は、我慢の沈黙ではなく、保守の沈黙である。Rev. Sasagawara は、Mr. Hayashi や Mr. Hosoume のように、アメリカという異国で生き抜くために黙って苦悩を耐え忍びながら汗水を流すことはしない。彼は、アメリカに住んでも、日系社会という安全圏に身を置いて、外界との接触を断ち、自分だけの精神世

界に引き籠る。盲腸炎で苦しむ娘を一人で病院に向わせる彼の無関心で冷淡な態度は、妻子の楽しみの為に運転手を引き受ける Mr. Hayashi や、不倫の末に墮胎した後の妻に優しく接する Mr. Hosoume の寛大さとは対照的だ。そして、Charles Crow が、彼のことを、“The Issei father can blight effectively through withdrawal as violence.” と評するように、結果的には Rev. Sasagawara の “withdrawal” もまた、前述 2 話の父親の “violence” と同様に有害である (Crow, “The Issei Father in the Fiction of Hisaye Yamamoto,” 124)。最終的に、Mr. Hayashi と Mr. Hosoume の暴力が妻の将来を破壊したように、Rev. Sasagawara の引き籠りは娘の才能を粉砕して施設に送り込むことになる。

周囲のすべての人間を避ける父とは異なり、Miss Sasagawara は、上述のように、Kiku や子供達など若い世代に対しては比較的友好的な態度を示す。彼女が人間嫌いに見えるのは、彼女自身の性質というよりはむしろ、僧侶の父親の影響が大きいものであると推測される。物語の最後で紹介される Miss Sasagawara の詩に示されるように、彼女は父を尊敬し、父の精神性を高く評価しつつも、禁欲的な精神性を娘にまで強要し、娘の個性や肉体的な欲望を抑圧したということが示唆される。そして最終的に彼女の精神破綻の一因として、彼女の父への尊敬の念と、彼女自身の情念との間に折り合いをつけることが難しくなったことがあったといえる。

肉欲を封印する僧侶の父親とは全く対照的に、肉体で情念を表現するバレリーナという職業を選択することにより、Miss Sasagawara は父からの束縛を離れることができた。彼女は一人の個性を持った個人としてアメリカ社会に認められ、バレリーナとして自己を自由に表現することができた。しかし、収容という出来事が、彼女の運命を変えてしまう。Miss Sasagawara は、再び父の監視下に引き戻されたのみならず、キャンプの住人すべての環視に耐えるという重圧さえ負わされてしまう。“Seventeen Syllables” と “Yoneko” で 1 世の父たちに強いられた我慢は、この物語の中では、1 世の

父ではなく、2世の娘の方に課されることになる。女性である Miss Sasagawara には、家長としての面目を保つ必要はないが、日系女性としてのあるべき姿を強要する周囲の圧力が加わることにより、Mrs. Hayashi や Mrs. Hosoume と同じ、女性としての苦悩も背負い込むことになる。しかも、彼女には、情念を注入できる俳句という趣味もなく、秘密を共有できる娘もなく、孤立無縁の状態である。収容された日系人の狭い価値観に合わないために狂気の仮面をつけられた彼女の我慢が限界に達した時、彼女の感情は、破壊ではなく、真の狂気という形で出現することになる。Yamamoto は、この Miss Sasagawara について、“I didn’t really consider her insane, I guess. I tried to say that if it weren’t for being put in the camp, she might have gone on.” と語り、収容が1人の芸術家に与えた負のインパクトの強さを憂えている (Crow, “MELUS,” 81)。

Miss Sasagawara はバレリーナであるが、次世代の子供達にバレエの技術を伝授するだけで、物語全体を通じて、彼女自身が実際に踊る場面はない。彼女は、収容という異常な環境の中で、自己の才能や個性を潰された日系人の代表である。そして、彼らの可能性を奪ったのが、収容を決定したアメリカ合衆国だけでなく、キャンプという異常な狭い社会の内部に閉塞され、アメリカ合衆国という現実を背を向け目を背けた日系人自身であったとは、歴史の皮肉であろう。

4) 次なる世代へ

以上見たように、Hisaye Yamamoto の代表的3作は、アメリカの日系人が沈黙の中に葬った数々の体験と、そのツールとしての「我慢」を語りの深層に蘇らせた。Charles Crow が Yamamoto とのインタビューの中で彼女の作品について、“you are giving a voice to the voiceless, to people who can’t speak their own words.” とコメントするように、自己の感情の表出を我慢

する者の声を代弁したのが Yamamoto の語りである (Crow, "MELUS," 80)。しかし、60年代の公民権運動を経て70年代にアメリカ社会で日系人を含めてマイノリティの権利が認められ、人権意識が高まりを見せるようになったころ、彼女は文学作品を発表しなくなった。それはおそらく、重要なメッセージを遠慮がちな文章の中に潜ませる独特の間接的手法の時代ではなくなったことを彼女が意識したからだろう。戦後、アフリカ系の新聞 *Los Angeles Tribune* での仕事を通してアフリカ系の人々の反人種差別の活動に触れ、New York の *Catholic Worker* でコミュニティ活動をした Yamamoto は、自分も含めて2世が収容体験を公然と語らなかったことを反省するようになる。1976年のエッセイ "... I Still Carry It Around" で彼女は、直接体験者の2世が無視しようとしたこの "uncomfortable period in our history" を発掘して日の光に当てようとしているのが "our more sensitive children" 即ち3世であると述べる。日系としてのアイデンティティを求める3世の若者達は、進んで日本語を学び日の丸のTシャツを着るようになった (Yamamoto, "... I Still Carry It Around" 11-12)。もはや日系であることを後ろめたく思う時代が終わり、アメリカ合衆国という多民族国家の中で日系であることに誇りを持ち、自らの民族の歴史を知ろうという意識を持つ世代が出現したのである。

インタビューの中で Charles Crow が、Yoneko や Rosie を "incipient artists" と感じ取ったと言うと、Yamamoto は、"you are the only one that has seen that." と肯定的に答える。そして、特に弟 Seigo の死後に、弟の死を考えないように歌を作る場面の Yoneko には芸術家の芽生えが感じられるかもしれないと言う。そして、Yoneko にも Rosie にも Yamamoto 自身の要素があるが、"I'm them" とは考えたくないと付け加える (Crow, "MELUS," 79)。歌を作る Yoneko は、2世の Yamamoto よりはむしろ、3世的である。誰もが自己を抑えて耐え忍ぶことによって成り立っていた旧来の日本社会ではなく、アメリカという人種のるつぼで日系人がアイデン

ティティを失うことなく生きていくには、声をあげて歌い主張することが求められているということを、Yamamoto は認識している。彼女自身は、歌詞を書くのみにとどめ、それを解釈して歌うことは次世代の人々の手に委ねた。

冒頭で挙げた *The Rafu Shimpo* の記事には、様々な分野で活躍する3世4世たちが、Yamamoto の作品を読んで日系人であることに誇りを持ち、それぞれの分野に進んだとコメントする。詩人の Janice Mirikitani は “Hisaye was my shero. . . She made me proud to be Japanese American and a woman.”、作家の Cynthia Kadohata は “For me, Hisaye was like a star in the sky—she made me dream about what was possible.” と謝意を述べ、アジア系アメリカ学専攻の大学教授 Kent Ono は、 “When I first began writing my dissertation, it was Hisaye Yamamoto’s courageous words that brought the soul of Japanese America to me through writing. . . She continues to be my ethical and moral guide.” と敬愛の念を示す (“Hisaye Yamamoto: ‘Humble Giant of American Literature’”)。Yamamoto の甥の1人 J. K. Yamamoto は、現在 *The Rafu Shimpo* の記者として活躍している。2010年11月、Yamamoto に贈られた Asian American Writers Workshop の生涯功労賞を病床の叔母に代わって受け取るために New York City に赴いた彼は、受賞に関連した記事を書き、叔母の功績を讃える人々の声を盛り込んだ。その中で J. K. 自身も叔母をアジア系アメリカ文学の第一人者として称賛し、自分の父が語らなかつた日系人の過去を叔母の作品を通して知り、それをもとに自分が知らない祖父母や戦死した伯父との繋がりを感じることができたと振り返る (J. K. Yamamoto, 16)。そして最後に叔母の受賞について “although Hisaye would simply have said ‘thank you’ without discussing her accomplishments, I thought that AAWW made an excellent choice.” と書いている (J. K. Yamamoto, 37)。この記事のタイトル “Seventeen Syllables Heard Around the World” が象徴するように、Yamamoto

の謙虚な語り口は、自信と誇りに満ちた後継者達によって、アメリカ全土に、そして全世界に、広められることになった。アメリカに人種差別は依然として存在するものの、太平洋戦争中の日系体験は、もはやタブー視される出来事ではなく、日系史の重要な一項目として語り継がれている。次世代へのパトンプスは確実に行われたと言えるだろう。

文献目録

Asakawa, Gil. *Being Japanese American: A JA Sourcebook for Nikkei, Hapa . . . & Their Friends*. Berkeley: Stone Bridge Press, 2004.

Cheung, King-Kok. *Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Joy Kogawa*. Ithaca: Cornell University Press, 1993.

Cheung, King-Kok. "Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi: Interview by King-Kok Cheung." Ed. King-Kok Cheung. *Words Matter: Conversations with Asian American Writers*. Honolulu: University of Hawaii's Press, 2000, 343-380.

Cheung, King-Kok. "Interview with Hisaye Yamamoto." Hisaye Yamamoto & King-Kok Cheung. *Seventeen Syllables*. New Brunswick: Rutgers University Press. 1994, 71-86.

Cheung, King-Kok. "Introduction." Hisaye Yamamoto & King-Kok Cheung. *Seventeen Syllables*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1994, 3-16.

Crow, Charles L. "The Issei Father in the Fiction of Hisaye Yamamoto." *Für eine offerne Literaturwissenschaft: Erkundungen und Erprobungen am Beispiel US-amerikanischer Texte*. 1986. Hisaye Yamamoto & King-Kok Cheung. *Seventeen Syllables*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1994, 119-128.

Crow, Charles, L. & Hisaye Yamamoto. "A MELUS Interview: Hisaye Yamamoto." *MELUS*. 14 (1) , 1987, 73-84.

“Hisaye Yamamoto: ‘Humble Giant of American Literature’.” *The Rafu Shimpō*.
11 February 2011.

<http://rafu.com/news/2011/02/hisaye-yamamoto-%E2%80%98humble-giant-of-american-literature%E2%80%99/>, accessed. 2 October 2011.

Kitano, Harry H. L. “The Effects of the Evacuation on the Japanese Americans.”
Roger Daniels, Sandra C. Taylor, & Harry H. L. Kitano eds. *Japanese Americans: From Relocation to Redress*. 1986. Seattle: University of Washington Press, 1991.

Nitobé, Inazo. *Bushido: The Soul of Japan*. 1905. Radford: Wilder Publication, LLC., 2008.

Yamamoto, Hisaye. “. . . I Still Carry It Around.” *RIKKA* 3-4, 1976. 11-12.

Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories*. Kitchen Table: Women of Color Press, 1988. Brunswick: Rutgers University Press, 1998.

Yamamoto, Hisaye. “Writing.” *The Rafu Shimpō*, 20 December 1968. Rpt. *Amerasia Journal* 3:2. 1976. Hisaye Yamamoto & King-Kok Cheung. “*Seventeen Syllables*.” New Brunswick: Rutgers University Press, 1994, 59-68.

Yamamoto, J. K. “Seventeen Syllables Heard Around the World: A tribute to Hisaye Yamamoto by her nephew.” *The Rafu Shimpō*, 4 December 2010, 15-16&37.

Yogi, Stan. “Legacies Revealed: Uncovering Buried Plots in the Stories of Hisaye Yamamoto.” *Studies in American Fiction* 17:2. 1989. Hisaye Yamamoto & King-Kok Cheung. “*Seventeen Syllables*.” New Brunswick: Rutgers University Press, 1994, 143-160.

高浜虚子『俳句への道』東京：岩波書店